

美濃陶磁歴史館だより

美濃陶磁歴史館
☎ 0591245

企画展 「山茶碗」
5月26日(日)まで
同時開催
重要文化財公開
「元屋敷陶器窯跡出土品展」

雑器の美 ～企画展『山茶碗』～

山茶碗は、平安時代の終わりから戦国時代初め頃にかけての日常雑器です。その造形にはとりわけ彩りもなく何の飾りもありません。ただ実用に耐えればよいだけの器ですから、陶工たちは美しさなど考える必要はなく、使用する人も美しさを求めていませんでした。

では、現代に生きる私達がこの山茶碗にそこはかとなく感じる魅力とは、一体何なのでしょう。それは、手作業による大量生産という果てしない繰り返しによって生まれた名もなき陶工たちの円熟の技と、そこから醸し出される簡素で気取らない自然な風合い。そして実用品ゆえの素朴な力強さなのだと思います。雑器にしかない魅力を、ぜひその目でご覧ください。



下石西山2号窯の碗と小皿（美濃陶磁歴史館蔵）



大藪西山2号窯の碗と小皿（多治見市教育委員会蔵）

カガクへのトビラ Vol.3

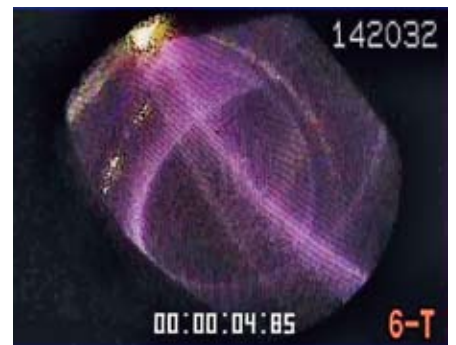
核融合科学研究所 / 総合研究大学院大学 (☎ 0592222)

プラズマって一体なに？

核融合科学研究所が、プラズマの研究をしていることをご存じですか？ 言えば、研究所の周辺を「土岐プラズマ・リサーチパーク」って呼びますよね。さて、その「プラズマ」って一体何でしょう。身近にあるプラズマを挙げてみると、蛍光灯やネオンサインの内部、雷の稲妻、オーロラ、ろうそくやたき火の炎などがあります。そして太陽や夜空に輝く星々も。実は宇宙の99%以上がプラズマなのです。これらにはどんな共通点があるでしょう。どれもガスのようなので、それから光っています。

物質は温度が高くなるにつれて、固体、液体、気体と変化します。氷、水、水蒸気というように。では、気体がもっと高温になるとどうなるのでしょうか。原子から電子が剥ぎ取られて、残ったイオンと電子がバラバラになって飛び交うようになります。これが「プラズマ」という状態です。ところで、蛍光灯の中もプラズマですが、そのプラズマの温度ってご存じですか？なんと1万度以上です。「えっ、どうして溶けないの？」と思われるかもしれませんが、実は、蛍光灯の中はとて薄い（大気の千分の四）ガスなので、触っても大丈夫なのです。これって、100度のサウナに入ってもやけどしないのと同じですね（お湯に比べて蒸気はとて薄いため）。温度が高いからといって、必ずしも熱いわけではないところが不思議です。

同研究所では、大型ヘリカル装置（LHD）を用いて将来の核融合発電のために必要となる超高温のプラズマの性質を研究しています。これまでに、1億度を超えるプラズマも得られていますが、蛍光灯のプラズマよりも薄い（大気の数十万分の一）ので、熱くて周りが溶けるようなことは起こらないのです。



1億2,000万度のプラズマ

